

## ディクソン・チュンバとティルフィ・ツェガエが大会記録で優勝

ケニアのディクソン・チュンバが東京マラソン 2014 を2時間05分42秒の大会新記録で制した。昨年キメットが記録した2時間6分50秒の大会記録を1分以上更新したのである。このタイムはチュンバにとって自己ベストであるだけでなく、東京で最も速いタイム（以前はタイスが1999年東京国際マラソンで記録した2時間6分33秒）、そして2月に記録されたタイムとしても最速である。今回チュンバが破れなかったのはツェガエ・ケベデが福岡マラソンで記録した2時間5分18秒の国内最高記録だけ。

レースが動いたのは30km 過ぎ、全てのペースメーカーが脱落した後だった。先頭にはチュンバ、トラ、キトワラ、キピエゴ、ソメ、キプサング、そしてチムサの7人が残った。

35km 過ぎにチュンバが先頭に立つとついていけたのはトラだけ。次の5km を14分21秒、とこの区間では東京マラソン最速のタイムでカバーしたチュンバ、記者会見で「35km でスパートする予定だったので、14分21秒は速いとは思わなかった」と回想した。40km 過ぎでもペースを緩めなかったチュンバにさすがのトラもつけなくなった。「2時間4分台の記録を持ち世界選手権でも昨年メダルを獲得したトラが強いのはわかっていた。最初は誰が勝つかわからなかったが、40km 過ぎには勝つ自信がわいて来た」と記者会見で説明した。

最後の2.195km を東京マラソンでは最速となる6分23秒でカバーしたチュンバは2位のトラに15秒の差をつけて優勝した。「スタートした時から今日はいいいレースができると思っていた。来年も東京マラソンを走りたい。今日はこんなに速いタイムで走れるとは思っていなかった。レース後半までこんなに速く走っているとは気がつかなかった」と回想した。

2位のトラのタイムは2時間5分57秒だったので、チュンバとトラは日本国内で2位と3位のタイムを叩き出したことになる。日本国内のレースで二人の選手が初めて2時間5分台を記録したのだ。3位のキトワラも2時間6分30秒と以前の大会記録を上回った。2012年大会の覇者キピエゴは昨年と同じタイム、2時間6分58秒を記録したが、2位に入った昨年と異なり、今日は4位に終わった。2位から9位までが日本国内の順位別最高タイムを叩き出している。日本マラソン史上最高のレースといえるかもしれない。

日本選手最上位は2時間8分09秒で8位となった松村康平、初マラソンの2時間11分18秒から2時間10分12秒、そして今回の2時間8分09秒と3大会連続で自己ベストを更新、10分の壁を破った。「目標の2時間8分台をだして、日本人で1番となったので嬉しい。もしアジア大会の代表に選ばれたら走りたい」と記者会見で語った。日本人2, 3, 4位の小林、黒崎、酒井も自己ベストで2時間10分の壁を初めて破った。

女子のレースはティルフィ・ツェガエが2時間22分23秒の大会記録で優勝した。「コース上厳しい区間もあったが、いいレースだった。将来の目標はメジャーマラソンでの優勝と、更に速いタイムを出すこと」と記者会見でティルフィは語った。レースは35km 過ぎにティルフィとディババの二人がロティチとカブーのケニア勢を振り切った。「35km 過ぎには勝ちたいと思っていた」というティルフィ、残り700mでスパート、ディババを振り切り、2位に7秒差をつけて優勝した。2位との差の7秒は東京マラソンでの最小記録と並んだ。2時間22分30秒で2位のディババ、2時間24分16秒で3位のカブー、そして2時間24分35秒で4位のロティッチの3人も従来の大会記録、2時間25分28秒を上回った。